三商第十六期生の記録

—卒業五十周年記念—

三商第十六期生の記録

刊行のことば
「三商第十六期生」について　矢島　幸
発刊に寄せて

第一部　三商在学中の記録

三商と私　石田　安正　24
東京府立第三商業学校（一九四二―四四年）　江口　壽男　26
【特別寄稿】
『青春のハイマート』明治大学教授・前学長（第十五期生）　岡野加穂留　36
君達十六期生の諸君へ　黒崎　稔　41
一冊のえんま帳から　古暮　正雄　46
今村直人校長先生と私　ほか二編　高橋　輝政　47
私の終戦秘話　竹田　一郎　50
故油井利喜之助先生を偲んで　竹田　一郎　51
全員合格　田部井孝則　52
私の戦災　内藤　幸次　52
西安の旅　成瀬　三郎　54
同期会　諸岡　理司　55
十六期生と共に歩んだ三商生活　矢島　幸　55

先生方の思い出

金井教官との再会　伊坂　勝次　58
清田先生のこと　石井　群二　59
江口先生のこと　石井　群二　60
あゝ、今村先生　大谷　啓治　61
校長のビンタ　大山　皓三　62
ゲンコツの温もり　小黒　貞郎　63

わが青春の息吹　金田　耕一　64
北古賀先生の憂鬱　木澤　文三　66
油井利喜之助先生の思い出　北島　恒男　71
志鎌先生の思い出　越森　行雄　73
杉原先生の思い出　佐藤荘次郎　73
墓参の記　鈴木　傳藏　75
清田榮一先生の世界　首藤　五郎　76
おまじない　木下　良一　79
サグジェスチョン　木下　良一　80
先生方の思い出　高野　清　82
越中島の青春　竹内雄一郎　87
宇梶先生との思い出　千葉　欣一　88
諸先生方の思い出　都築　佑吉　89
巧遅と十年計画　内藤　茂　92
終戦前後のこと　西川　力　95
「友」　平野　健吉　97
師　恩　眞中　康行　98
諸先生の思い出　光岡　悦雄　106
三商時代のあれこれと　森川　山麓　109
恩師石田安正先生の想い出　横塚　由光　113
玉津先生に教えられたこと

戦争・東京大空襲の記録

懐かしき浅草北三筋町六十番地　相原　政之　115
裸の水筒　伊坂　勝次　117
爆弾と焼夷弾の下　石井　群二　119
三月十日・下町大空襲　磯部　茂利　122
三月十日前後のこと　内田　弘　125
私の体験した東京大空襲　岡本　正明　129
受験から大空襲までの思い出　川口　武繁　131
三月十日　北島　新六　133
三月十日と終戦の春　小林　暢夫　134
ああ下町大空襲　鈴木　秀雄　138
『厚い雲』　辻　彰彦　139

戦後五十年目に想う私と東京大空襲　奈良　剛　142
九死に一生　橋本　雄吉　144
疎開先（静岡）での思い出　八田　庄一　146
私の誕生日の三月十日の思い出ほか　見市　憲治　149
東京大空襲を思い、願うこと　簑　弘祐　150
三月九日夜半から翌払暁にかけて　横塚　由光　151
第十六期甲種飛行予科練習生　角屋　昭治　152
学業半ばの戦車兵　山根　登　157

勤労動員の記録・思い出

戦時下の思い出　石川　暢佑　176
勤労動員　伊東尖之助　179
学徒動員時代から終戦まで　斎藤　進　180
勤労動員の思い出　松山　一　182

三商時代の想い出

奇妙な配達人　新井　憲　183
三商の頃のこと　荒田　裕　184
出会いと縁の思い出　池田　益三　186
棒倒しから得た教訓　石井　群二　191
三商と戦争と私　石澤　清一　193
記憶のきれはし　伊藤　政廣　196
三商、そしてその後　大橋　傳二　200
万歳三商　小黒　貞郎　201
三商時代　金子　隆一　202
三商進軍歌と一人の十六期生　金田　耕一　210
三商の心象風景　木下　良一　212
一年坊主の試練　二題　小宮　千秋　236
混乱の日々の中、束の間の娯楽の時　小宮　千秋　237
戦中雑記　小諸　雄一　241
遥かなる三商時代を想う　小山　恒夫　246
記憶の底はあこがれだった　白坂（旧姓木曽）　秀吉　247

私の三商時代の思い出とその後　須藤　榮吉　249
十六期の思い出　高野　清　250
三商時代の想い出　高木　昇　258
悪事・珍事・困る事　匿　名　259
三商時代の思い出　中一訓　260
三商に学んで　中村（甫改め）肇　263
一年五組の友の思い出　橋本　雄吉　264
三商と私　長谷川永一　265
戦中・戦後の三商生活　眞中　康行　267
私の三商時代　水野幸次郎　272
私の青春の軌跡　吉田　厚夫　273
三商思い出話　吉野　和夫　286
三商時代とその後　和田　昭　295

亡き友たちの思い出

村田幸雄君の事　相原　政之　296
堀喜久男君に感謝　秋山　尚彦　297
先に逝った友たち　石井　群二　298
青春　荒木光男との思い出　小黒　貞郎　302
矢代治男君のこと　北島　恒男　303
清水一男兄を偲ぶ記　越森　行雄　304
繪面昭二君への思い出　佐々木雄一郎　306
矢代治男君の思い出　佐藤荘次郎　307
市原富夫君のこと　首藤　五郎　309
中村照一君を悼む　首藤　五郎　309
石塚康蔵君のこと　高木　昇　310
亡き友の思い出　高野　清　311
思い出の人々　都築　佑吉　313
亡き友を偲ぶ　中一訓　314
館野一夫君のこと　橋本　雄吉　318
亡き友森健君を偲ぶ　松井麗次郎　319
生亀敏雅君のこと　眞中　康行　319
故大内豊靖君　森　芳宣　321
岸　勲君の思い出　森谷　信男　322

私の三商時代の思い出とその後　須藤　榮吉　249
十六期の思い出　高野　清　250
三商時代の想い出　高木　昇　258
悪事・珍事・困る事　匿　名　259
三商時代の思い出　中　一訓　260
三商に学んで　中村　肇（浦改め）　263
一年五組の友の思い出　橋本　雄吉　264
三商と私　長谷川永一　265
戦中・戦後の三商生活　眞中　康行　267
私の三商時代　水野幸次郎　272
私の青春の軌跡　吉田　厚夫　273
三商思い出話　吉野　和夫　286
三商時代とその後　和田　昭　295

亡き友たちの思い出

村田幸雄君の事　相原　政之　296
堀喜久男君に感謝
先に逝った友たち
青春　荒木光男との思い出　秋山　尚彦　297
矢代治男君のこと　石井　群二　298
清水一男兄を偲ぶ記　小黒　貞郎　302
繪面昭二君への思い出　北島　恒男　303
矢代治男君の思い出　越森　行雄　304
市原富夫君のこと　佐々木雄一郎　306
中村照一君を悼む　佐藤荘次郎　307
石塚康蔵君のこと　首藤　五郎　309
亡き友の思い出　首藤　五郎　309
思い出の人々　高木　昇　310
亡き友を偲ぶ　高野　清　311
館野一夫君のこと　都築　佑吉　313
亡き友森健君を偲ぶ　中　一訓　314
生亀敏雅君のこと　橋本　雄吉　318
故大内豊靖君　松井麗次郎　319
岸　勲君の思い出　眞中　康行　319
森　芳宣　321
森谷　信男　322

清水一男君との出会いと別れ　横塚　由光　323
石塚康蔵君のこと　吉羽　亀之　326
故津雪健彦君のこと　吉田　厚夫　327

校友会活動の記録・思い出

足で調べる　眞中　康行　329
三文会（三商美術部）のこと　中一訓　332
吾が青春の三商文芸部　越森　行雄　333
幻の三商謡曲部　眞中　康行　334
写真部の事　中一訓　336
不揃いのユニホームでプレーボール　木澤　文三　336
野球部創立期の出来事　光岡　悦雄　338
十六期バレー部　高橋　進　341
校長室での思い出　原　輝雄　343
卓球部の想い出　辻　彰彦　345
三商卓球部　山上　俊明　349
私の青春とマラソン　角屋　昭治　350
三商剣道部の思い出　松井麗次郎　351
三商渓声会のこと　中一訓　352
年輪・貴重な体験
—三商卒業50周年記念アンケートから—　353

第二部　三商卒業後の記録

初の海外旅行雑感　秋山　尚彦　360
振り返ると　伊東尖之助　366
人生の中の三商　岩佐　吉純　369
五十年後の今　私は　稲田　宏　373
独り言　隠居屋清五郎　375
十六期生　内田弘の生きざま語録　内田　弘　376

ずいそう　大谷　啓治　378
なぜ信仰の道へ　貝瀬　健一　379
五十年の足あと　金田　耕一　381
もうひとつの履歴書　北原　昇　384
帆船模型製作に魅せられて二十年　鈴木　秀雄　390
私のふる里　千葉　欣一　393
好きな文字「生」　内藤　茂　395
食前感謝の詞　内藤　茂　395
三商第十六期関係者慰霊祭　内藤　茂　397
コレクション　中　一訓　398
「テレビと私」　中　一訓　400
わが人生の道程の一端　奈良　剛　401
「食前感謝詞」考　眞中　康行　405
三商留年半世紀　宮坂（旧姓前田）　専一　408
三商教育とその後五十年の仕事　横塚　由光　409
随　想　竹内雄一郎　413
「ガン」と遊ぶ　内藤　茂　420
変り種　内藤　茂　424

その後の私の生活　内藤　茂　427
俳句春秋　竹内　孤逢　432
絵画への道のり・感動への道のり　鈴木　滝央　433
法曹界に三十有余年　高野　清　435
座談会「教育界にありて四十年」　449
座談会「家業を守り育てて五十年」　458
座談会「歌の世界に身をまかせ」　473

第三部　資料編

「所　感」　吉澤　徹　484
書人日儔と府三商、吉澤先生との御縁　高橋（日儔）昇一　489
吉澤徹先生の憶い出　長坂源一郎　492
前途洋々だが平凡な生活を送れ　今村　直人　501

思い出の記　二代校長　今村　直人　503
人生の信条　二代校長　今村　直人　505
在職中の思い出　二代校長　今村　直人　507
伝統に誇りを持て　二代校長　今村　直人　508
鈴木永二君の三菱化成工業社長就任を祝う　509
今村直人二代校長に壽像画を贈る　510
二代校長今村直人先生のご長寿を祝う　五代校長　清田　榮一　512
弔　辞　五代校長　清田　榮一　517
校歌校章の由来　五代校長　清田　榮一　519
思い出を中心に　清田　榮一　520
同窓生で描く日本地図　五代校長　清田　榮一　524
「蒔かぬ種は生えぬ」の教訓に因んで　五代校長　清田　榮一　534
十六期生につながる思い出　清田　榮一　540
故清田榮一先生経歴　542
越中島のうつりかわり　峰島総一郎編　543

●写真（P）と参考資料

開戦を伝える新聞
終戦を伝える新聞
校　歌
三商進軍歌
明治神宮参拝（P）
戦前の市電切符
三商音頭　三商数え歌　三商ツンツン節
教科ご担当先生一覧　学年別学級担任先生一覧
昭和十九年度都立三商二学年学級別名簿
昭和十九年度都立造船工業二学年学級別名簿
三校長と校舎（P）
バレー部・篭球部（P）
陸上競技部・戦時中風景・運動会（P）
文芸部・演劇部（P）
戦前・戦後の卒業證書等（P）
昭和二十三年卒業記念写真
昭和二十四年新制高校卒業記念写真
三商の歴史と昭和の歩み
あとがき

刊行のことば

私達昭和五、六年生まれは、昭和不況の最中にこの世に生を受け、昭和六年満州事変、昭和十二年日支事変、昭和十六年太平洋戦争突入と正に戦時体制の下で生き育った。

私達が東京都立第三商業学校に在学した昭和十八年四月から昭和二十三年三月までは、太平洋戦争中および戦後の激動の中にあった。

昭和二十年三月、十四、五歳にして東京大空襲によって家を焼かれ、掛替えのない肉親を失い、友を失う悲しみを味わった。戦中、戦後の食糧難、住宅難の耐乏生活を耐え抜き、敗戦の日を境にして既成の価値観、道徳観の百八十度の大転換に不安と戸惑いつつも、未来にあるかなきかの光を求めて戦後社会に身を処して来た。

この間の国家社会体制および思想の変革の激しさは恐らく我が国の歴史上まことに希有のものであり、そこから得た私達世代の経験体験と思想形成もまた史上極めて特異なものであり、貴重なものといえよう。

私達は人生の中で最も感受性に富むといわれる青年期の三商在学中に受けた学校教育の大転換、社会道徳などの大変化を通して、私達が自ら培った青春時代の考え方や感覚がその後の人生に大きな影響を及ぼし、好むと好まざるとに拘らず現在の私達の人格を形成する上で掛替えのないものであったことは全く疑う余地のないことである。

日頃自らの過去については語ることの少ない私達であるが、いつしか齢六十の半ばを過ぎ人生の総決算の時期に差しかかる秋にあたり、また、正に明年は、東京都立第三商業学校卒業五十周年記念の年であり、かつ、三商創立七十周年記念の年でもある。これを契機に、私達の三商在学中の記録ならびに卒業後の人生の記録と若干の資料を一冊の書として取りまとめることとした。

刊行に当たっては、諸先生、諸先輩方から貴重な寄稿と資料を頂き、また、同期生諸君から多大なご協力を得たことに深く感謝の意を表するものである。

平成九年（一九九七年）秋

「三商第十六期生の記録」刊行会

「三商第十六期生」について

戦争たけなわの昭和十八年四月、三百八十余名は感激と希望をもって入学した。戦争は苛烈さを増し、総てが軍国調一色に染まり、自由な教育なぞ望めない環境の中にあっても、三商にはまだ比較的のんびりした気風が残っていた。下町の商家の子息が多かったためかも知れない。一年生のときはまだ平穏で、今村直人校長の下、立派な先生方によって伝統ある三商教育を受けることができた。

翌年四月東京都立造船工業学校（昭和十八年四月水道橋の東京府立工芸学校内に新設、二クラス八十余名）が三商内に併設され、三商生は募集停止となった。

二年生は希望により、三商のまま進む者と造船工業に転換する者とに進路が別れた。この結果、二年生は、三商生徒が五クラス二百四十五名、造船工業の生徒が五クラス二百十七名で、計十クラス四百六十二名となった。

四月の学徒勤労動員令によって、三商生徒は上級生から逐次勤労動員に出動し、造船工業の生徒は一学期中に短期間、深川の町工場「大和造船所」で木造船（特攻用兵器）製作の勤労奉仕を行った。二学期に入ると、二年生全員が勤労動員に出た。三商生は、神東塗料、竹内鐵工所、東京舶用金物、日本開発機製造であり、造船工業生は、石川島造船所、三菱製鋼、日東鑛工業の各工場であった。

この間、サイパン島が米軍の手に落ちてからはB29による空襲が頻繁になり、三月九日夜半から十日未明にかけての東京大空襲によって江東地区は壊滅した。職員・生徒の約九百名が罹災し（うち百十名が死亡）、家屋等が焼失した。同期生は誰が亡くなったか幾人亡くなったか、正確な処は今もって分からない。

昭和二十年八月十五日終戦。勤労動員は解除され、焼け残った学校に戻った。九月から授業が再開されたが、戦後の社会不安、生活不安で落ち着いた勉学は無理だった。

昭和二十一年三月造船工業学校は廃止され、工業学校に残りたい者は他の工業学校にそれぞれ転校して行き、三商に転換を希望する者は三商に復帰した。

四年生になってからは比較的落ち着いて勉強することもできたし、校友会活動（クラブ活動）も再開されて活発化して来たが、それ以前のことははっきりしない。

昭和二十三年一月三十一日は創立二十周年記念日に当たり、旧制最後の最上級五年生として初めての周年記念行事に取り組んだ後、三月六日、二百五十七名は第十六期生として卒業式を終え、就職、自家営業、進学とそれぞれの道へ巣立った。

なお、高校新学制実施に伴い、都立第三商業高等学校に移行したことから、新卒業者のうち四十七名は高校三年生となり、また、就職した者の中にも夜の二部の高校三年となった者は翌年三月に卒業した。

三商第十六期生と言われる人は、戦中戦後の激動期を経て来ただけに、次のようにいろいろな事情の人がいる。

①三商に入学、三商で卒業した者（新制高校一回生を含む）、
②三商に入学、造船工業に転換、戦後三商に再転換して卒業した者、
③造船工業に入学、戦後三商に転換して卒業した者、
④造船工業に入学、戦後他の工業学校に転校した者、
⑤疎開先への転校者あるいは戦後再度三商に同学年ないし一学年下で復学した者、
⑥在学中、軍関係に志願合格して、戦後三商に同学年ないし一学年下で復学した者、
⑦他校からの転校者、
⑧空襲等による多数の戦災死者

など、三商七十年の歴史の中でも一際特異な存在である事には間違いない。

発刊に寄せて

矢島　幸

既に還暦を過ぎ、一歩一歩古希へと近づいている十六期生諸君が、「我が人生の青春時代」はどうだったのか！と長い人生の一齣を追憶してそれを明らかにし、記録して「自分史」の一助とすると共に、子や孫達への語り草として残したい。とこんな思いが次第に強まり、それには同じ時代に共に生き同じ苦楽を共にした多くの同期生の生々しい声を通して、実現に運んだらとの趣旨で、今回その素案が示されるのを知って、当時の生き残りの担任の一人としてまことに同感にたえません。

これまで昭和三十七年、日本橋亭で第一回の同期会が開かれて以来、内藤君始め多くの幹事諸君が骨折られて継承され、その都度貴重な資料が残されてきたが、それをもふまえて、更に多くの声が収録されれば、貴重な立派な成果があげられるのではなかろうか。

是非同期生諸君の賛同と御協力を切望する次第です。

又それと共に、いろいろな困難を伴う幹事諸君の無償のお骨折りに対して深く感謝の意を捧げると共に、厚く御礼を述べて私の御挨拶といたします。

第一部　三商在学中の記録

三商と私

石田　安正

「三商第十六期生の記録」に何か書けとご連絡をいただいたので、改めて考えて見ると、三商に勤務したのは私の五十年の教員生活のうち僅か七年間であったことがはっきりし、今更のように三商が私に与えたものの大きさを再認識しました。

実は三商に移る前に歴史の旧い或私立の商業学校に勤めましたが、そこでは教師は皆自分の授業だけ済まして他に用事がなければ拘束されない、誠にのんびりした勤務条件で、好きなように自分の時間が楽しめました。三商に来てビックリ。何も彼も整然と運営され、空きがなく、暇そうなひとは一人もいません。今考えれば当然の教育活動が行われていたわけですが、その時には毎日息が詰まりそうでした。そこで今村校長先生に「とてもやっていけそうにありません」と正直に告白したのですが、軽くあしらわれてしまいました。

それからが私の修行時代でした。文学とはしばらくお別れで、学校教育に関するもの、教師というもの、「How to be, How to do」、の再履修でした。つまり私の教師としての資格がここから与えられ始めたのでした。昭和十年に取得した英語科教員免許状などはなんと軽いものだったこと！

在任中に授業を持ったのは第十一期から十八期まででしたが、十六期の諸君とお馴染みになったのは遅く終戦後でした。それまでは勤労動員の十三期の諸君に付添って飛行機部品製造の工場へ行っていましたし、その前の平常授業日も次第に拡大熾烈化する戦況のもとでは落ち着いたものではあり得ませんでした。強歩会があったりとでは落ち着いたものではあり得ませんでした。強歩会があったり野外演習が行われたり、ある時は、早朝解散の夜間演習の帰りに学校では授業に穴があいていたので、一クラス引き受けて教室にいきました。授業をしながらもどうにも眠くて、自分で何を言っているのか解らないが、生徒が笑わなかったので、眠りながらもまずまずの授業をしたらしかったことがありました。

経験談がでたのでお話しますが、あの三月九日の大空襲です。ちょうど石岡先生、事務の松田さんと私が宿直でした。うるさくおそってくる蚊を追い払いながらもう眠ろうかと、事務室で並べた椅子に横になろうとした途端に、空襲警報がなりラジオが叫ぶ。玄関に飛び出て見ると、既に門前仲町方面には火の手があがっていました。もう学校も戦場の真っ只中。校庭に山と積まれた自動車のスクラップは燃え上がる、事務室の横壁には焼夷弾が当たって一面に炎が広がる。松田さんはお宅が心配で急いで帰られたので、石岡先生と二人、水をいれたバケツを提げて校内をあちらこちらと見回る。そのうちに避難してきた人達が病人をベッドに寝かせてくれと運んできたので保健室に案内すると、病人だけを残して皆がサッと立ち去ってしまい、私は医者ではなし困って、どこが悪いのかと尋ねると、かすかな声で「心臓病」。とっさに腕をとって脈を検ようとしても仲々触れない。やっと弱々しい脈搏を捕らえるとそれがひどい不整。しかしどうにも術がなく手を拱ねくばかり。その時「講堂のカーテンが燃えている！」という声で、弾かれたようにバケツを持って駆け付けました。高い火元まで何杯水を投げ掛けたか憶えがありませんが、どうにか炎は治まり、次に二人は自動車の燃えている校庭へ

出ていきました。あとで考えればそんな物は放っておけばいいのに、懸命に火を消そうとし続けました。轟音を放って頭上低く飛ぶB29を不思議にも恐ろしいとは感じないで、夢中で校庭を走り回りました。辺りがほの明るくなり少し落ち着いたときふと気がつくと、鉄帽の下に被っていた綿入れの防空頭巾の頬にあたる部分には拳大の焦げた穴が空いていました。無我夢中とはあんな状態のことなのでしょう。夜が明けてからの行動についての細かい記憶はありませんが、午後遅くなって校長先生が苦労して学校に来られたので種々報告しました。忘れられないのは、その時なぜ避難者を学校にいれたかと、たいそうなお叱りを蒙ったことでした。管理者としてそうしなければならなかったのでしょうが……。

昭和二十年四月から学校に帰って一年生の授業を持ちました。そして八月。夏休みはなく、生徒一同と終戦の詔勅を聴きました。動員に出ていた上級生が次第に戻ってきて学校らしくなってきました。それからやっと十六期の諸君と私との付き合いが始まったのでした。

英語の授業はまずまずでしたが戦時のブランクで三商が得意にしていた英語力の水準は低下していました。それを急速に回復しようとする諸君の熱意にも時代の要求が汲み取れました。しかし真剣な授業風景のなかにも、思わずニヤッとしたことを憶えています。となりの部隊のGIが英語の授業とみて教室に入ってきました。出てくれとも言えないので授業を中断、なにか英語を教えてくれと頼むと、アメリカ国歌（Star-Spangled Banner）を歌い出し、教えようというわけ。少し進行したので歌詞を黒板に書いてくれと言うと書き始めましたが、綴がメチャクチャ。皆は声を出して笑うわけにもいかず？？？……そのうちに時限の終わりがきて兵隊さんはサット帰ってしまい、我々は本国人より書き取の力は優っているとガヤガヤ。誰かその時のことを憶えている人はいませんか？。

昭和二十三年創立二十周年記念の行事が上野池の端都立文化会館で行われ、われわれのクラスから当時はまだ珍しかった新劇、ルナールの「うつろい」の翻案「南の風」を出したのは皆さんの記憶に残っていると思います。演技や台詞まわしの指導をしてもらいに、荒田君、石井君、木下君達と私の大学での同級生の家まで行ったような気がします。彼が東宝に勤めていて、「南の風」の主役（荒田君演）を演じたことがあったからです。三商の生徒が演劇を手掛けたのは恐らくこれが初めてだったでしょう。

新制高校二年生になり、三年生になり上級受験に対応するようカリキュラムをずいぶん無理して編成、英語の時間が週八時間もあったのは十六期生の諸君だけだったでしょうが、なんとか早く力をつけたいとしていたのです。ところがその時申し訳ないことが起きてしまいました。私の転任の話です。両校の間に挟まれて、義理に動きがとれず、校長先生方のお話し合いに任せた結果、私は都立桜町高校へ行くことになりました。学年の半ばでクラスの諸君を置いて行ってしまうことに随分悩みました。担任は宇梶先生にお願いし、特例として授業は私の研修日に一日出ることを許されたのがせめてもの償いでした。今でもその時のことを振り返ると心が痛みます。

長文をくどくどお目に掛け誠に申し訳ありませんでしたが、これが私のお詫びであり、私の心の中にある三商の幾つかの切り口なのです。

東京府立第三商業学校（一九四二～四四年）

江口　壽男

門出

七月十九日、兄の辰男が「重松君が（三商の校長が会いたい）と言っている」と言うので、翌日、私は美濃紙に墨書した自信のない履歴書を持って教育局に行った。重松先生はこの前と同じに度の強い眼鏡に角刈りで、三商への道順を説明し、電話で先方の都合を聞いて下さった。弟に対するようなことば使いで気さくに私の世話をされた。

私が三商の校長室に通ると、今村直人校長は開口一番、

「先生は、いつから来ていただけますか」

と私に聞いた。私はこれで採用が決まっている事を知った。重松先生のお力である。私はこの時、履歴書以外、成績や人物を証明する物を何ひとつ持っていなかったのである。

面接がすむと千葉義美先生のご案内で校内を一巡した。この時間は終業式行事の中休みで、思い思いの恰好で休んでいた生徒は、私たちが近づくと一斉に立ち上がって敬礼した。そのキビキビした動作でこれからの仕事に張り合いを強く感じた。

私の初出勤は国学院卒業式前の九月十日である。その朝、校長は私を「明朗闊達な」と生徒に紹介した。少年時代、陰鬱だつた私が最も憧れていたことばだったのである。

最初の勤務は週の二日は昼、四日夜である。昼は「文法作文」一単位づつ七クラス、夜は憶えていない。翌年も文法作文は十四クラス持ったから、文法の本は丸暗記できた。授業は隔週に作文を行うから、七組の採点は家庭で週三十時間位かかり切りになる。私はこれが当り前だと思っていたので、この難行に体当りし、国語の先生としての実力を最初の二年で充分につける事ができた。文法・作文は大概の国語教師の嫌がるものである。

最初の一年間は授業嘱託（現在の常勤講師）で翌年教諭となった。免許状の資格は中等学校と旧制高等学校（現短大）の先生になれるということで、初任給は八十五円である。同じ私立大学出の人より一級上、十年経験の叔母と同じであった。

十二月二十六日、私は長岡から来て家族となった従妹の松木ウメノと結婚した。

ウメノの母マトから「松木家と江口家とは切っても切れない親類である。兄太作に充分尽すよう」と言い聞かされ、私の父太作からは「お前は他家にはやらない」と言われ、両方の親の気持が私たちの結婚という形になったのである。私たちは火の様な恋愛場面も持たず、二人連れの散歩もしていないが、縁談の進行とともに、相手をまたなきものと思う気持は熟してきたのである。

最初夜間部で担当したクラスについてはあまり記憶がない。一生懸命やったつもりだが、期間が半年で行事もなかった。先生と生徒との会話の時間が少なかったのだ。その組の級長は小林秀夫で背が高くハンサムで実直な良い生徒だった。一番背の高いのは会津久夫である。成田線で会った穂刈勇一は「先生がご存じの生徒で三商を卒業できたのは数える程ですよ」と言った。この生徒達は昭和二年生れが多く高等小学校を卒えて三商生になったのである。時局はこ

の青年達を激湍に巻きこんで容赦しなかったのである。この組の子で小林と一緒に学校の給仕をしていた田中銀造も私の目から離れるとまもなく病死した。

奉職した年が明けて三月、私の宿直の夜、海軍下士官が事務室に来た。「藤村清允？」と名乗り、海軍省に勤めているが上司の許可を得て三商入学の手続きをとりにきたと言う。私が、翌日校長に報告すると校長は快諾した。翌四月、彼は私の新担任のクラスに入ってきた。彼は私より一歳下である。私は彼に文字を教える以外何も教える事がないように思えた。そのままでいたら、彼は私の生徒と言うより生涯の良き友となっただろう。一年後、私は工場に行き、戦局は急坂を駈け下りて行った。

彼のクラスは夜間の三年生で、昼間私が持ったのは都築佑吉や田村矩紀のいた一年生である。一年生は可愛いかった。私はこの入学式に「君たちがここまで来られたのはご両親のおかげである」と訓辞した。柄にもない事を言ったものである。私は二十五歳八ヵ月。

蓼科と環山荘

三商は虚弱者のために合宿を計画した。前半が蓼科で後半が環山荘である。中央線茅野駅から西北に十五キロが蓼科高原である。環山荘は松戸市南端、江戸川畔にある三商の寮である。

蓼科の水は手が切れる程冷たく温泉は低温だが空気清澄である。

ある日、山に登ろうとして出発しようとすると、宿の主人は言った。「午後三時頃大雨が降るから気をつけなさい」それでも空は青空だから心配もせずに出掛けた。

親湯からすぐに狭い山道になって左は蓼科山、行先は大河原峠。そこは諏訪と佐久の境である。もうじき峠という時右側が豁然と開けて広い笹原の向うに丸い山が見えた。通りかかった草刈りの人に道を聞くと「笹丸の向から回ってくると、また、ここに出られますよ」と言う。

峠につくと、佐久は濃霧で頭上は曇っていた。峠から右に折れると地図にある池が二つ。双子が池である。人の歩ける道はここまでである。亀甲池の方は倒木と薮が道を塞いでいる。私は磁石を図上に置いて方向を確かめ、薮をかきわけて鞍部を越えると……あった。

大きさは三商の校庭くらい丸型である。山に囲まれて静まり返っている。深さは三十センチ位。水は澄明である。底面は米粒の半分位の褐色の砂が敷きつめられている。その砂よりや、大き目の砂が小粒の砂の上に亀甲の型に並び、亀甲の模様は網目のように池の底を掩っていた。直径四～五センチの亀甲の外を、二十五センチ位の亀甲が小石で囲み、その外を拳骨ほどの石の亀甲が区切っていた。人の近づきにくい山奥に誰が作ったのだろう。

そこから明るいほうに進むと、そこは笹丸の中腹だつた。

下山の途中、沛然と大雨がおそってきて、ハタとやんで、あとは暗い曇天となった。

蓼科親湯、高原温泉ホテルに二週間居て帰京した。主任は千葉義美先生である。

家で十日程休んで環山荘で合宿した。蓼科は何人だったか、今度は三十人位である。今度も主任は千葉先生である。

環山荘は東と北とが山に囲まれているので、初代吉沢徹校長が命

名された。南から国府の台沿いに来た道は東の坂を登ると栗山の水道タンクへ、西に向かった道は堤防となって大きく湾曲し矢切の渡しに向かっている。川は江戸川で対岸は小岩である。

米は生徒が各自持参し、野菜は隣の家で調えてくれる。魚は市川の町まで買出に行く。国府の台をのり越えた向う側の坂下に三商生徒の豆腐屋がある。ここは国府台の重砲連隊御用だからいつも豆腐を作っていた。余談だが「世の中は星と錨と闇と顔」と言うことばがあって、「豆腐屋は星を、私たちは顔を使ったのである。調味料は塩しか手に入らなかった。食用油は私の顔で手に入り、テンプラだけは不自由させなかった。

炊事は四班に分けた生徒が当番で作った。生徒が喜んだのはテンプラである。衣はうどん粉に塩を入れたものである。魚を焼く時は濡らした紙で包むと焦げないのである。私の最大の傑作はカレーライスである。説明書を読まなかったから、でき上った物は鼻を近づけただけで鼻が痛くなるものである。生徒は先生の作ったものだから黙々と食べた。

一週後、中一日生徒を帰宅させた。生徒不在の朝、千葉先生と私とは栗山の街を通り抜けて、じゅん菜池の方を散歩した。ここで食用蛙の不思議な鳴き声を初めて聞いた。じゅん菜池の傍を八年前にサイクリングで通り抜け、二年後にまたそこを通って市川在郷軍人の訓練を受けた。三十年後にはすっかり市街地になっている。

一年の生徒たち

このクラスには田村矩紀が居た。この子の成績は抜群以上更にすぐれている。親切で気がついて運動神経もよい。何より統率力は大したものだ。

この組のクラス会を環山荘で開いた。その当日、私が市川国府台の駅に下り立つと、既に全員は整列していて、敬礼、人員報告、隊列を組んで環山荘に向かった。環山荘では十三歳の子供たちは無邪気に思いきり羽を伸ばして遊んだ。最後は、裏庭で茗荷をそれぞれ両手いっぱい摘んで引き揚げた。帰りも整々と駅へ向かった。この組には菓子屋の子が三人居たから菓子だけは食べ放題である。その一人は浅草の雷おこしの社長の息子である。この組の名部隊長の田村も昭和二十年三月十日戦災で死んだ。秀才薄命である。

同じ秋、全校競歩があった。

明治神宮西参道から往復二十四キロと言うから折り返しは甲州街道桜上水附近だろう。

一人々々は靴下一ぱいの砂を弁当と一緒に携行する事と、各クラスが隊伍を崩さず行進する事が規則だったから、私は先頭の組を厳しく規正して歩かせた。

この位の距離なら私には大した苦痛ではない。私は自分の四組からいったん七組まで戻ってから歩きを速め先頭の一組に追いついた。どの組も落伍者はいなかった。私の作戦は往路は緩り、復路を速くしようとしたのである。十八キロ頃から体力の弱い者の疲れが目立ち始めたから大きい生徒に重荷を二個もたせるようにした。私は後尾まで下って先頭まで急いだが四組までが精いっぱいである。私も砂袋を一つ持ったが二つでは指揮する力がなくなってしまう。その日は快晴、絶好で、所要時間は四時間弱である。

一年生はうまく行ったが、二年生以上はバラバラな個人々々の競

歩になってしまった。

このころ、十月十八日、私たち夫婦に長男威男が生まれた。

この学年に、田村の他に私より優れた生徒がいた。内藤茂である。彼は、私の果せなかった望み、大学の先生になった。しかも私の母校国学院の先生である。

流行歌と戦況

三商で三時頃外を見ていると小学生が歌いながら行く。

今こそ討てと宣戦の　詔書に勇む強者が
火蓋を切って押し渡る　時、十二月その八日

この戦争を聖戦と信じている私たちは無邪気で勇ましい子供たちを頼もしく思った。所が小学校にも上がらぬ子供の歌には次のようなものもある。

若い二十歳の嫁さんが　七つ八つの子供を連れて
今日も行く行く買出し部隊　でっかい袋にゃ米三升

これの元歌は

若い血潮の予科練の　七つボタンは桜に錨
今日も飛ぶとぶ霞が浦にゃ　でっかい希望の雲が湧く

（注　予科練は海軍飛行予科練習生のこと）

こんな歌もある。

替え歌　四百余人の乞食　笊持って門に立つ
小父さん銭おくれ　くれないとパンチやるぞ

元歌　四百余州を挙る　十万余騎の敵
国難ここに見る　弘安四年夏の頃

替え歌　金鵄上がって十五銭　栄えある光三十銭
遥かに仰ぐ鵬翼は　二十五銭になりました
ああ一億の民は泣く

（注　金鵄、光、鵬翼は煙草の名）

元歌　金鵄輝く日本の　栄えある光身に受けて
いまこそ祝えこの朝　紀元は二千六百年
ああ一億の胸は鳴る

勝った勝ったと謳歌しても、国民は、物資の不足や生活の逼迫から、戦が公表通りでない事をなんとなく悟っていたのである。

赤道を越えてガダルカナルまで進んだわが軍も補給が続かず「餓島」になっていた。そこから転進できた事を大本営は大威張りで発表したが、本当は敗退したのである。（二月）

緒戦の英雄山本五十六元帥も南太平洋で戦死した。（昭和十八年四月十八日）

北方で睨みをきかせるはずにアッツ島のわが軍は、上陸してきた米軍の濃霧の中でも命中する火器に、なすすべもなく全滅した。（同年五月二十九日）

刃も凍る北海の　御楯と立ちて二千余士
精鋭挙るアッツ島　山崎大佐指揮をとる　山崎大佐指揮をとる

十月の三商の運動会では、この歌は「清田先生指揮をとる」と替っている。

日本軍が玉砕を続けている九月、同盟国イタリーは無条件降伏した。それより先、ドイツ軍は冬将軍に敗れ、一月末にスターリングラード篭城軍二十万はソビエトに降服した。

造船工業生として入り三商生になった生徒の中に、長男威男の恩師石井茂先生がいた。

不本意な勤労（一九四四―一九四五年）

安藤機器

昭和十八年十月、二十歳をすぎた学生の徴兵延期制度は打ち切られた。第二国民兵役の私はそれでもまだお呼びはなかった。昭和十九年になって戦局は日々悪化しているとは言え、銃後のわれわれに敵弾が飛んでくるわけではないとみんな安心していた。私の息子の威男はスクスクと成長し、クラスの生徒はよくなついているし楽しく三月休みを迎えた。私のようなヒヨコはこの時期あまり用はなく、新校務の発表を待つだけでよかった。

ある朝、私は学校から電報で呼び出された。校長室で私が申し渡されたのは新五年生、最上級生の担任だと言う事である。次にもっと驚いたのは、学業を一時中断して生徒を連れて石田安正先生と一緒に軍需工場に行けと言うことである。私はあまりの抜擢に身が震える思いがした。行き先は札の辻の安藤機器という会社で飛行機の部品を作る所である。

他に沖電気と宮田自転車に行く先生が五人、すべて老巧の先生ばかりだ。

就労の日、父兄も集まって盛大な見送りを受けて安藤の工場に向かった。

工場に入った最初の一週間は教育期間である。安藤弥一社長自ら

不孝な三商生

私の組の吉川の母が亡くなった。私は学校から歩いて永代橋を渡り小網町の家を訪ねた。家は誰も居なくて、冬近く午後も遅かった。近所にも人は居なかった。吉川に聞いても「大丈夫です」と言うだけである。ようやく父がジャワ沖で浅間丸と運命を共にしたことを聞き出した。

この子は普段から口数の少ない子で、その日は歯を食いしばって天宮を通って御徒町まで歩いたが気が晴れなかった。

翌日はどうかと心配したが、その後休まず登校している。私が何をしてやったか私は憶えていない。その後学年が変わり、私は勤労動員に出てその子に二度と会っていない。

私が三商に来た時五年生で翌年三月に卒業した生徒で中森という人がいた。私はその人の組に出ていないから顔もわからない。

その中森は私の弟恒男と大学で同級生である。この人の母親は三月十日の大空襲で行方不明になった。中森が必死に捜している時、ある屍体を見せられた。その姿はあまりに無惨で「これは母です」とはどうしても言えなかった。だから中森の母は今でも行方不明だと言う。彼は母の生前の生き生きした姿を永遠に瞼に収めておきたかったに違いない。彼を親不孝と言えるだろうか。

これは翌々年のことである。

この学年の終わりに、造船工業が三商に併設されることになって、三商の生徒が大勢転科手続きをとった。しかし、造船工業はろくに授業もしないうちに終戦で廃校になり、その生徒たちは三商に戻って戦後の不況の中三商生徒として就職できた。

「近代工業は十八世紀の後半産業革命に始まり、ハイスピードスティール（高速度切削鋼＝ハイス）の発明によって更に大量生産が進んだ」と歴史に始まり、精密工作の意義や工作品の見取り図の見方書き方の説明があった。名講義である。講堂は普段は三百人位入る食堂で、嘉悦学園の女生徒と同席だった。窓の外は山手線、京浜線、東海道線などの数十条の軌道の上を引っ切りなしに列車が走っていた。嘉悦の生徒曰く「一時間に百本以上の騒音では勉強できません」!?嘉悦は高橋先生と若い婦人の桜井先生、それに石田先生と私の四人は小さい職員室を貰った。実習は鉄片を鏽で平面に削る事と鑿をハンマーで叩く事とがある。

昼夜二交代制になったのは四月半ばである。出勤は午後三時で、二十四時間勤務して翌日午後三時半、石田先生の組と交替する。深夜は会社の寮で仮眠する事になっている。

三商が担当する仕事は、手仕上げ・ミーリング・旋盤・シェーパーと工具の出し入れとそれらを一括する管理事務である。部品の円筒部は旋盤で削ったもので、角のような部分はミーリングで削る。旋盤は鋼材を回転させてそこに棒状の先端のハイスを当てて削るもので、ミーリングは平行してつけられた三個の車輪状のハイスが回転する中を鋼材を通過させる時に削り残されるものが角の部分である。シェイパーはハイスが水平に平行線を描くように往復する所に鋼材を置くと切削面は平面になる。削り屑は紐の渦巻のように続いて出てくるものは鋼材で、粉のようにこぼれてくるのは鋳材である。鋳型からはみ出した部分はイバリ、失敗作はオシャカである。十分の一ミリの精度で計る尺度はノギス、百分の一のはマイクロメーターである。軍部の嫌う敵性語なしには作業はできない。

作業が九時に終ると、新橋まで乗って烏森を西に行くと乃木寮がある。ここは乃木大将が新婚生活を送った土地だと伝えている。翌朝一番電車で工場に戻って三時半まで勤める。三商生の工場への出入りは四列縦隊の行進隊型である。工場内では立ち通しがほとんどで轟音で日照もない。埃があっても、埃は暗くて見えない仕事場は健康上全く疑問である。

私は時々工場内を巡回するが、大概は工場内の管理室から所在なさそうに生徒の作業を眺めていた。時には警備員にちょっと挨拶して門の外に出る。門前から北に向かうと慶應大学・乃木寮・虎の門の通りである。私が何をしても咎める人も期待する人もいない。機械をいじる事も鏽を振り回すこともできない。まるでご隠居様だ。

ある夕方、東条内閣の書記官長星野直樹が来て、安藤機器の小さい応接室にふんぞり返っていた。その室には安藤社長以下重役たちが身動きのできない程に詰めていた。仮令この会社が押せば毀われそうでも気概だけは偉丈夫であってほしいのに、皆、ひたすらペコペコだ。星野は全くの田舎紳である。こんな安っぽいのに国が牛耳られているのかと情けない。民情視察などの心構えはなく、聞いてやるぞと威張っていた。

また、時々来るのに三田警察の特高刑事がいた。一見好人物だが、掌をひるがえせば何をするかわからない。いつも長時間駄弁ってから帰っていった。

始めのうちは学校から面来先生が時々授業に来たり、泉岳寺まで往復二キロの駈足もやった。ある日、登校日があって教練をした。配属将校が生徒に話しかけると、ある生徒は知らん顔、ある生徒は

とんちんかん、ある生徒は何度も大尉に聞き返した。毎日の騒音で耳がいかれてしまったのである。十一月のある夕方、会社で作っている部品を使った飛行機が写っている映画を見に、大森の映画館にいった。それは複葉の水上練習機だったから生徒はがっかりした。

この頃は戦局は急坂を転げるように敗戦に向っているらしいが、相変らず勝利の軍艦マーチを聞かされている。

私たちは配給以外に工場の食堂で給食があって、私はそれで満足だったが、生徒の中にはそれだけでは足りず、外の雑炊食堂で食べさせてほしいと言ってきた者もいる。私は会社には悪いと思ったが、特別外出許可証を書いた。この頃の雑炊はヤマト糊の中にわかめや野菜やらが浮いた感じで、箸一本を立ててそれが倒れなければ濃さは合格だと言われていた。当時なら、私だってすき腹に三杯くらいいけるかと思う。

二人の友

それはまだかなり暑い時分である。私は西久保先生が生徒の附添をやめてその工場に勤められると聞いた。先生は明治の元勲の子孫だと言うことで、私より十歳上の老巧な方である。私が三商奉職以来大変お世話になった方だから、全くびっくりした。

私は、札の辻橋を渡って海岸通りを南にかなり歩いてその工場についた。約二キロである。受付で来意を告げるとすぐに勤労課に通された。先生は「いつも早耳のあなたが、今度は遅かったですね」と笑って、採用辞令をお見せになった。私が誰とでも友達になって情報が入りやすい事を言ったのである。私はガッカリしたが、満三十七歳の若さで大会社の課長にいきなり任命されたとは、余程、会社が先生を買っていたのだと思った。人にはそれぞれの事情があることなので、その事にはもう触れず、とりとめのない話をして、もと来た道を引っ返した。足がとても重かった。

秋が深まる頃、三時の休憩で庭に居ると、臨時ニュースが入った。この時は「海行かば」の曲だった。この曲は悲しい知らせで、特攻隊の事が多い。敵はカミカゼ攻撃と言っていた。私はラジオを聞いているうちハッと耳を疑った。「〇〇中尉寺田行二」と言ったのだ。翌朝の新聞を見ると、國學院の同期生寺田君にまちがいない。別れの盃を交す写真はなかなか好男子である。私の気持ちは讃美と批判とがまぜこぜになっていた。私と交友グループが違うから挨拶だけでまとまった話をした事はない。何でも平安神宮の偉い人のご子息だと言うことだ。そして、同期生七人に一人は戦死したのである。

深夜作業

十一月十三日、私の父が亡くなった。病気は蜂窩織炎となっていたが、直接の死因は肺炎である。満六十五歳である。空襲の激化と栄養不足が死期を早めた。その日、私が家族の疎開先からの帰途、右手首に大怪我をした。

その後、いつの頃からか工場勤務は特殊な二交代制から通常の昼夜二交代制になっていた。つまり、乃木寮での仮眠はなくなったのである。深夜も継続して働いたのである。

労働は強化されたが、工材は払底し材質も悪化した。仕事がない時が多いから生徒も工員も休息したがっていたが、機械のそばを離れる事は禁じられていた。それでも栄養失調で疲労困憊の生徒・工員は、この愛情不足の労働規則を無視して機械のそばから一人残ら

ず姿を消していた。この寒夜にどこかで一夜を過ごした人々は夜空が白み始める頃元の位置に戻っているのである。時々警備員が灯りを振り振り見廻りに来るけれど、この沢山の怠業者を探そうとした事は一度もない。そして重役が現場を見に来た事も一度もない。その重役も軍や監督官庁の手前一所懸命やっているふりをしなければならなかったのだろう。私のような二十七歳の若僧の文句など問題ではなかったのだ。

工場の深夜、私は管理室に座って無人の工場を眺める事が多かった。時計が次の日を示す頃、私の腕の大怪我の痛みは耐えられない程になって私は呻きを必死に抑えていた。そんな時、会社の事務系の人が来て雑談をして行く事はいくらか痛みを緩和してくれた。治療は信濃町の慶應病院で主治医は茂木先生である。負傷後二ヶ月、正月の半ばには繃帯もとれた。

その頃、米空軍の空襲は激しさを増して警報は連日連夜鳴り響いた。

生徒の事故

一月から石田先生の組も私の組も日勤になって、作業は工作機械から板金に替っていた。私が憶えているのは、一枚のアルミ板をU字型に曲げて、U字型の底部をへの字状に曲げる作業である。この無理な作業を生徒は上手にやって行くのである。

生徒の事故はいつだったか忘れたが、二度とも私の留守中である。私はこの事故を思い出すたび心が痛むのである。ひとつは、金子延弘が会社の命令で工場の屋根に登っているうち、足を滑らせて下に落ちた一件である。このあと、私の組の生徒が会社の塩鮑重役をぶん殴ってしまった。もうひとつは、金属加工の作業台を運ぶ作業で山崎信治が台と何かとの間に指を挟まれた事である。その作業台は畳二枚ぶん程、厚さ十五センチの鉄の中空の箱である。もし、私がその場に居たら、そんな作業はさせなかったかもしれない。金子も山崎も指導者の一人で、積極的に作業に当っていたのだろう。

私がなぜ留守だったか今も憶い出せない。金子は卒業後会っていない。山崎は若いうちに死んだ。

そうしているうちに、三月十日帝都は大空襲を受け、三商生の九割は戦災に遭った。私の組の杉浦金太郎、長島寛、前年の組の田村矩紀と坂東恒夫の四人は死んだ。

そして、安藤機器は失火のために全焼した。

北千住の駅で

三月十日以来、三商生の過半は家を失った。私もやっと一人だけで知人の家に住まわせてもらった。本式に住む家を見つけるまでの間、二度ほど、学校に行った。片道五キロを歩いている間に路傍で焼死体を見つけ、川の上に溺死体を目にする事が度々あった。私の疲労はどうしようもなく、心もイカレていたから今となっては何も心にないようなものだ。いつのまに、卒業したはずの三商生を連れて北千住構内の日本通運の荷役を受持つ事になったのか、その経緯は謎である。

三月十六日頃、西新井に住む家を見つけ、四月初めから北千住に通った。その頃になって記憶が鮮明になり始める。作業は、荷物を貨車に載せ、あるいは貨車から荷物をおろす仕事である。最初の仕事は薪を貨車から下ろす仕事である。生徒たちは薪を無造作に地べ

たに山積みした。それを見た現場監督は激怒した。「高等小学校の子供よりだめだ」と怒鳴ったが、生徒はキョトンとしていた。薪はまず三束を川の字に置き、その尻に二束を重ねる。と言う説明である。たわる。その上に向きを変えて五束を並べると五束が地上に横天下の三商生も、安藤機器の優秀職人もこんな事は見た事も聞いた事もない。大きな生徒だから教えなくてもわかるだろう、とは無理と言うものである。

こう言う単純作業で過ごなしに叱られたのだから、生徒たちは著しく勤労意欲を失った。ここに来たのは進学先の大学の決まった六十人である。大学の勤労動員の場所が決まるまでの預かりの生徒、いや学生である。自分達の本来居るべき所ではない、との思いだから坐り心地に悪い薪の上に正座させられた気持ちだったと思う。

作業はせいぜい午後三時頃には終わる程量が少く手持ち無沙汰で ある。そして、その時々で場所が変って落ちつかない。ある日、係の人が私に「学徒が見当りません」と言ってきた。私がさんざん捜すと生徒たちは日当りのよい大型無蓋貨車の中で雑談していた。この組は勉学好きなのに、一年も勉学から遠避かっていたのだ。いまの学生なら叛乱を起こすだろう。先生の私は叛乱は起こせないのだ。両者の調停をいやいやしなければならない。

作業が終ると私は五キロを歩いて西新井の家に帰る。途中の銭湯が運よく開いていると私は飛び込んだ。バスで帰る時もある。バスは毎日故障する事になっている?だから故障を待つ。荒川を渡ったあとならエンコのバスを尻目にさっさと歩き出してしまう。

四月十四日、また焼け出されて、近くの家に無理に泊まって、焼け跡から焼け野の彼方に見えるお化け煙突に向かって一直線に歩く。歩く方が乗り物より間違いないのである。

そうこうするうち、市川に家が見つかってそちらから通う事になったのは二十日頃である。市川真間から関屋まで京成で、東武牛田から一駅で北千住である。たった一駅だから大概歩いてしまう。毎日の交通費は定期でなく日割りで支給されて買うのは私の自由、つまり定期券を買うとその差額は思わぬ収入となった。西新井から市川への引っ越しは勤務中の生徒を頼んだ。これはいけない事なのに、当時の私の善悪の判断は全く麻痺していたのだ。私はもう戦意など全くなく、立っているのがやっとな程打ちひしがれていた。

四月十四日の西新井の空襲で弟の哲男が腕（左?・右?）を骨折した。この時は慶大に入っていたから塾生ということで慶應病院に入った。五月二十五日、山の手の空襲のあと、私は病院に行こうとすると中央線は不通である。歩くと病院まで八キロ、飯田橋の土手にB29の尾翼が落ちていた。私の確認した撃墜敵機の三機目である。権田原の坂を行くと不発弾がころがっており、血を流した馬が立っている。外苑に入ると、不発弾と馬があちらこちらにあり、遠くで爆発音も聞こえた。恐しいことだ。病院は健在だった。哲夫は腕から重りを垂れて横になっていた。昨日は恐かったそうである。そりゃそうだろう。雨霰（アラレ）と爆弾の落ちる中でじっとしているのである。恐怖の時、体が動けるならもがきのたうつ、相手がいるなら声を出してまぎらす。どちらも駄目ならどうすればよいのだ。

三月十日のは絨毯爆撃、昨日のは飽和爆撃だそうである。

帰りは市ヶ谷駅から神田の方にでた。靖国神社も母校も無事だった。

効果のない兵器

そんなある晴れた日、大学の学友請川昇（ウケガワ）君が思いがけず日通を訪ねてきた。彼は西多摩の福生（フッサ）航空隊の整備将校である。私と彼と荒川土手に腰を下ろして川を眺めながら話をした。南から見た大川はこの上なく青かった。戦況の不利なのはわかり切っていたから話に出なかった。三十分でも惜しみつくっている事は二人では珍しい事である。生涯できれば世界最初のジェット戦闘機である。彼のお土産の大きな箱の蓋を二つ、私はペロリと食べた。それから日光街道の写真館でカメラの前に立った。幽霊のような私と恰幅のよい彼とは妙な取り合わせである。二人とも口には出さないが、これが最後だと思っていたのだ。

博男が私に言った。「連山（ダイ）はB29とそっくりだよ」なるほどそっくりの重爆だ。

寒い頃、私が三商で所人かの先生と宿直していると、ある先生の話「風船爆弾が関本から浮上して偏西風に乗り米本土まで飛ぶそうなもの（ママ）ですよ」戦争に生き残れるとは嬉しい事だ。

沖縄は熱戦中で日本軍の抵抗は日に日に衰えて行ったが、鈴木貫太郎首相は「沖縄は大和山ではない」と力んで見せた。鈴木内閣は、どうやって戦いの終末を少なく戦を終らせるかという使命を持っている事は戦後にわかった。六月十六日、ひめゆり部隊集団戦死。

時機

荒谷川明はこんな大変な時局にジッとしていられないと特幹候補生に志願した。

蓮昭司は新動員先が決まったと小樽高商に旅立ち、私は上野駅まで送った。

慶應生平沼耕造に召集令状がきた。彼は後に哲男の同級生となる。

ある午後、空一面真黒くなり焼けた紙などが降ってきた。それはどこの空襲かは皆目わからない。その日四時頃仕事を終って京成に乗ると、東に行く程空が明るくなったので安藤機器の方かなと思ったら、翌朝、横浜だと発表された。

何日かあと、校長から転任しないかと話があった。私は二度の戦災、四人の愛弟子の死、家族も遠く離れ、全く打ちひしがれていたから転任する気にはなったが決断がつかなかった。こんな時、吉住菩策先生なら良い助言を下さるかと動員先にお訪ねした。先生は最終は本人しだいとしながらも私を転任の方に傾けて下さった。私の半年のもやもやも晴れて芝商に行くことにした。芝商はもと京橋商業と言って理紀男の母校である。

辞令は昭和二十年六月三十日、初出勤は七月一日である。

（故江口清男先生の自分史「江清記」から抜粋）

【特別寄稿】

『青春のハイマート』

明治大学教授・前学長　岡野　加穂留（第十五期生）

青春への序曲

東京都立第三商業学校！府立三商！都立三商！この響きは、永遠に私の耳だを打つ。入学の昭和十七年四月から二十一年三月までの四年間は、まさに太平洋戦争の開戦の翌年から、敗戦の年の昭和二十年の翌年までの在学期間。その後の私の人生にとっては、掛け替えのない時期を形造ったように思う。

太平洋戦争末期には、工場現場での重労働と食糧不足による栄養失調・病気で、江東区錦糸町の都立病院入院や、青森県七戸町の城の中にある母方の親戚の屋敷に、アメリカ軍の迎撃に備えて、本土決戦の為の体力回復に一時転居したりした事もあった。それでも剣道で鍛えた気力だとは思うが、無我夢中で生き抜いてきた十代半ばの私の体の中には、不思議なことに、今でも当時の事柄が鮮明な私特有の昭和史となって息付いている。一つには、三商卒業後の私の人生の中での拘わりが、余りにも内外の政治の世界で展開される事柄の占める比重が高いことにもよるのかもしれない。半世紀も過ぎた遠い昔の三商時代を懐かしむ思い出とともに、他方では、これらの苦い経験が批判的に観察される理由にもなっているのかもしれない。

私の昭和史の記憶は、三商入学以前にさかのぼる。幼心にも、あの雪の日の二・二六事件の朝に、母に手を引かれて戒厳令下の連隊（当時は兵隊屋敷と言った）の前を歩いていった過ぎ去りし微かな記憶。昭和十二年七月七日の日中戦争（当時は、「日支事変」と言った）ぼっ発に、近衛歩兵第一連隊に赤紙一枚の天皇からの招集令状で即日に入隊をした父の記憶。小学校六年の時の昭和十六年十二月八日の太平洋戦争のぼっ発時の「大日本帝国陸海軍は、西太平洋上において米軍と戦闘状態に入れり」のＮＨＫ（当時は、「日本放送協会」と言った）アナの日米開戦の放送と、大日本帝国大本営発表に続いて、勇壮な『軍艦マーチ』のメロディーに、子供ながらも興奮をしたころの記憶。中学二年から、激しい戦時下で、中学生と言えども学業の継続よりも戦争に必要な物資生産に携わるべきだとのことで、学業を中止して軍需製品を生産する軍需工場で働くための東条内閣の『学徒動員令』で、越中島の日立製作所で爆弾製造の工程作業に組み入れられた時の経験。米軍の空襲爆撃で命を落とした友人の記憶。二十歳前後の大学生は学徒出陣で戦場に送られ、特攻隊で戦死した先輩も私の周辺にもいた記憶。

軍事教練

青春の一番に短い、しかも敏感に、そして純粋に物事を正直に把握する時期に、自らを置きその後の自分の人格を激しく形成していく精神史のひとこまの出発点になった十代の「知」の広場が、都立三商だった。そこでの先生の教えは忠実に守られ、時代が時代だっただけに、それを絶対に信じて疑わなかった小さな自分を、激動の歴史の中に文字どうり横たえたのである。

当時、私の家族は中央区（旧京橋区）新佃島二丁目に住んでいた。越中島の東京高等商船学校の正門の前から明治丸を左に見て、隅田川に架かる相生橋を渡った所だ。中秋の名月が大川に黄金色に映り出され、河の堤防に乗ると『助六』の台詞（せりふ）ではないが、「安房上総が手にとるように見える……」千葉県の房総半島の鋸山がくっきりと見え、高い建造物の無い時代だったから筑波山も家の三階の物干し台から手にとるように見えた。

兄（十三期）が既に二年前に三商に入っていた。私のいた佃島小学校の進学組は、府立三中（両国高校）か府立三商で、父母が「お兄さんも行っているし、近いほうが何かと便利」が理由で、走って一・五キロの距離の三商に入学した。二年後には、弟（十七期）も入学した。私は、商業と商科とか「商」の付く字が嫌いで、東京陸軍中央幼年学校又は陸軍士官学校か海軍兵学校に入って大日本帝国軍人になる事を目的にしていた為、旧制中学である三商をその予備校か第一のステップくらいにしか考えていなかった。

当時の校長は福岡県人の三十歳代から各地で校長経歴をもつ今村直人先生。太平洋戦争開戦の翌年のために、軍事教育が活発になり、軍事訓練担当は予備役に編入されていた銀縁眼鏡で、サーベルの鎖をがちゃがちゃ鳴らして歩くので「ガチャ！」があだ名の遠藤陸軍少佐が配属将校。その下によく馬で登校して来た伊藤陸軍大尉。「安さん」と生徒から愛称で呼ばれていたたきあげの安川准尉と木本軍曹という下士官がいた。定期的に皇族の陸軍戸山学校校長の陸軍少将・賀陽宮殿下（かやのみやでんか）の閲兵査察があった。分列行進や厳冬の御殿場の富士山麓の滝が原演習場で軍事訓練をやり、夜間の重装備の行軍もやらされた。

丸坊主であだ名「海坊主」の今村校長は、日本がアメリカや連合軍に勝利を収めるためには、中学生諸君もどしどし「軍人になりなさい！」とことあるごとに訓話をし、当時、話題になっていた土浦の海軍飛行予科練習生（いわゆる七つボタンの予科練）になるために、受験を積極的に進めたりしていた。成績の良い生徒には、陸軍士官学校か海軍兵学校への進学を進め、私はその方を選んだ（この当時のいきさつは、一九九五年に出版した拙著『日本国にもの申す―絶えざる警戒こそ自由の代価―』《東洋経済新報社》に詳しく書いておいた）。時には、校長のアイディアで陸軍士官や海軍士官に任官した先輩たちが来ては、立派な講堂で「来れ！後輩諸君！」と題してよく演説をしていった。今村校長は、このころが得意の絶頂期であったかもしれない。当時の日記を読むと、そのころの事柄が走馬灯のように浮かんでくる。空腹・重労働・厳格な訓練の連続で苦しい思い出なのだが、不思議にそうは感じていない筆の運びになっている。先生のお話を信じ、歯を食いしばって「鬼畜！米英撃滅！」「神の国日本！」「神風」が吹いての勝利を確信していたかもしれない。小学校に入る前後から剣道をしていたので、三商でも剣道部に所属した。

惜別の唄

『教育勅語』・『軍人勅諭』・『戦陣訓』・『臣民の道』などといった大日本帝国のイデオロギー教材を無批判に読まされ、暗記させられた。戦争を扇動する新聞（朝日・毎日《東京日日》・読売などの全国紙）や、右翼学者や思想家、もち論のこと軍隊や政府は当然のことに、彼らは積極的に国策に協力し、一般大衆をただ政府の命令に服従させるために、政治的催眠状態に陥れ、「鬼畜米英撃

滅！」「撃ちてしやまん！」の政治的な集団ヒステリー状態に巧妙に仕立てあげた。防火用水・火たたき（はいたたきではない！）・竹やりでの民間武装を行い、愛国婦人会・国防婦人会の防空ずきんに白かっぽう着で、今から見れば子供遊びのような防火訓練などを躍起になって展開をした。あのころの日本社会は、正常は影を潜め、異常が〝正常〟の仮面をかぶって横行していた。真実の声はいつも小さく、聞こえにくいものになっていた。

一二年になったら、英語は敵国語だという理由で、教科から排除され中国語（マンダリン詰まり北京官語）を習得させられた。放課後、川岸運動場でベースボールをやっていたら〝戦争ヒステリー症状〟の上級生から「馬鹿野郎！ノダマ（野球とはいわない）をやるやつはスパイだ！」には、ビックリ仰天。その後は上級生が怖くて「ノダマ」に恐怖感を持つようになった。徐々に反戦思想や自由主義者取り締まりの特高刑事とか憲兵の動きが目立つようになってきた。

三年生になった昭和十八年のある日。学校から帰ってきたら、母に「軍隊に行くのをいやがって身を隠していた若者が家に帰って来たところを憲兵に見付かりその場でピストルで撃ち殺された」と言う話を聞かされた。

日立製作所に学徒動員で来ていた東京高等師範学校（後の東京教育大。今の筑波大）の古賀さんという学生が、いよいよ召集令で軍隊に取られると言うので、お別れに工場の屋上で銃剣術と剣道の試合をしようということになった。「岡野君には敵わないようだから、僕は竹刀より長い銃剣道でいくよ」と言って、数回の手合わせをした。別れぎわに、工場の庭に掘った防空壕（ごう）で、高等師範の学生がよく歌っていた『蒙古放浪歌（もうこほうろうか）』を合唱した。

「心猛くも鬼神ならぬ
人と生まれて情けは有れど
母を見捨てて波乗り越えて
友よ兄等といつまた会わん」

このような悲壮感のあふれ哀調を帯びた歌詞を十代の若者が、朗々と詩を吟じるように中天を仰いで歌うのであった。「砂丘にいで　砂丘に沈む　月の幾夜は　我らが旅路……」

幾つか年齢の上の東京高等師範の学生とは気が合い、重労働の合間に彼らの話を良く聞いた。今でも、この歌は不思議に脳裏を離れないのである。あの時の師範学校生は、当然、年齢からいって大部分は戦争犠牲者になった。

国粋主義・国家主義・国家神道・大日本帝国・聖戦・大東亜戦争・五族共和・大東亜共栄圏・大御心（おおみごころ）・神御一人（かみごいちにん）・神風・神国日本などといった言葉が、無批判に宣伝され、上からの厳しい国家管理の教育効果の恐ろしさで、人々はこれらを丸呑みにしていた。当時の私には、国家主義の積極的な協力者というものが判らなかった。恐ろしいのは、政治における全体主義的宣伝はいつの時代でも、詰まり、民主政治を名乗っていても、同じような事を繰り返している点である。そこに政治のもつ本質的な恐ろしさが隠されている。

東京に爆弾の雨

昭和二十年「三月九日の深夜二十二時三十分より十日の四時過ぎまでアメリカ空軍B29の百三十機が襲来・爆撃。帝都（東京の

事）の深川・本所・向島・千住・浅草などを焦土と化す（『私の日記』より引用）。土曜日、晴れ、陸軍記念日と書いてある。前日の九日は七時三十分から十六時過ぎまで、日立製作所で「調砂」（溶鉱炉の高熱で溶かされた鉄を流し入れる砂形を造る仕事）をしたと記録してある。まさかその深夜に東京大空襲になるとは想像もできなかった。大火災と爆風で激しい火の手と強風が吹き出したとき、大声で近所の警防団長が「神風だ！神風が吹いた！」とメガホンで走り回っていたのを覚えている。夜空を焦がす真っ赤な煙り色が、〝神風〟どころではなかった。焼け焦げた異様な臭いが風に乗って鼻を衝くようになった。まさに地獄絵を見る心地であった。数日間そのものであった。友人やその家族が多数犠牲者となった。

「神国日本」が負けた！

運命の八月十五日が来た。その二日前。八月十三日の日記に「昼、製作所の屋上から目の前にある石川島造船所（現在のIHI）に米軍機F6Fが急降下爆撃をするのを見る。月島方面に爆弾を投下。疲労の為に工場の作業機のそばで眠る。同級の小山に起こされる。十四時三十分帰宅。なすのしんこで食事。十七時二十分過ぎくらいから米軍艦載機五百五十機、東部軍管区各地に来襲。一部が帝都に侵入。工場・民家を襲撃す」と有る。「八月十五日（火）晴天。帝国政府、四国共同宣言を受諾す。大東亜戦争終結。阿南陸軍大臣割腹す。」

「八月二十一日（火）晴天。九時登校。講堂において校長先生より重大訓話有り。即ち、我らの今後の進むべき道なり」

校長は、事あるごとに生徒を講堂に集め、訓話をしたと書いてあるが、日記は内容には触れていない。校長の話が判らないので、剣道部の仲間と校長室で、敗戦の理由や自由とか平等とかデモクラシーの意味を質問に行く。今村先生も「私もよく判らない。戦争には勝つと思った……これからは……文化国家になるのだから、大学に行ってしっかり勉強をしなさい」とのことであった。なにかやり切れない気持ちが先に立った。先生方から反省の弁が出てくる余地が無いほど、当時は天地がひっくり返った状態で、ぼう然自失でない人はいない状態だった。三商ばかりではない。みながみな、大きな歴史の流れに翻ろうされてしまっていた。三商の学友で、十代の半ばで戦争の犠牲になった人々や、戦後の極端な食糧不足から病気で命を断った友達を忘れる事は出来ない。なんの為に友達たちは犠牲になり死んで行ったのか!?

敗戦後の特殊状態で、私は三商を四年終了で卒業した。一年間、神田の予備校に通い、明治大学政治経済学部政治学科に入学。学部三年生の時に友人に頼まれ深川二中で一年間、大学院研究生の時に一年間だけ母校・三商の時間講師として教壇に立った。それがきっかけで、教育の道を歩む気持ちになった。

大学の研究生活に入り、北欧・中欧諸国や東南アジアでの政治制度の研究やアメリカの大学の客員教授の経験などをしてきた。これらの経験を通じて振り返ってみると、常に私の人生の原点は、三商時代からスタートをするのである。

厳しいルールと美しいロマン

青春時代の評価は、総て「今」の自分が基点になって考え勝ちで